

DIC を伴う AML-cuplike の 1 症例

◎石塚 洋明¹⁾、久保 清夏¹⁾、森川 潤也¹⁾、山口 悠樹²⁾
社会福祉法人恩賜財団済生会 大阪府済生会野江病院¹⁾、洛和会 音羽病院²⁾

【はじめに】AML-cuplike はカップ様の核陥凹の芽球を 10%以上認め、細胞免疫学的には CD34 陰性、HLA-DR 陰性であり、*FLT3-ITD*、*NPM1* 遺伝子変異を高率に認める疾患である。一方で、微細な顆粒を有すること、類似した細胞表面マーカー所見を呈することより、急性前骨髄性白血病の variant との鑑別が問題となる。今回、DIC を伴った AML-cuplike 症例を経験したので報告する。

【症例】62 歳男性。現病歴は、食欲不振、抜歯後の止血困難、黒色便。白血球著増、末梢血液中に芽球様細胞出現(ペルオキシダーゼ染色陽性)、急性白血病疑いで当院紹介となる。

【検査所見】生化学検査では LD 541 U/L、血液検査では白血球数 $10.7 \times 10^4 /\mu\text{L}$ と著増、赤血球数 $296 \times 10^4 /\mu\text{L}$ 、血小板数 $1.6 \times 10^4 /\mu\text{L}$ と低下を認めた。末梢血液中に芽球を 96%認めた。この芽球は小型～中型で、核陥凹を持つ cup 様形態を約 10%認め、一部アズール好性の封入体、核形不整の細胞も認めた。凝固検査では PT 活性 68.8 %、APTT 24.5 秒、Fbg 138.6 mg/dL、D-dimer $73.5 \mu\text{g/mL}$ 、

AT3 100.5 %であり、Fbg 低下、D-dimer 上昇を示した。これらの結果により DIC を伴う急性白血病が疑われ、骨髄穿刺が施行された。骨髄は吸引困難で、骨髄中に芽球を 98.6%認め、cup 様形態を示すものが約 10%見られた。染色体検査で、-2,add(3)(q11.2),+t[3]、細胞表面マーカーは CD33 陽性、CD56 弱陽性、CD7、CD13、CD34、HLA-DR 陰性。遺伝子検査では、*FLT3-ITD* 変異が認められ、AML と診断された。治療開始前に測定された FDP は $826.6 \mu\text{g/mL}$ であり、Fbg は 118.7 mg/dL であった。

【まとめ】今回、核陥凹を持つ cup 様形態を示す細胞の一部にアズール好性の封入体、核形不整の細胞を認めた DIC を伴う AML-cuplike 症例を経験した。

FLT3-ITD 遺伝子変異を伴う AML は予後が不良という報告もあり、末梢血中の芽球の形態を観察し、遺伝子変異を疑うような形態異常を認めた場合、適切に報告することで、迅速な診断への助けになると考えられる。

連絡先：06-6932-8600